

英語の名詞 standard の多義性について*

平 沢 慎 也

1. はじめに

本稿では、アメリカの言語学者 Ronald W. Langacker の創始した理論である認知文法 (Cognitive Grammar) の観点から、英語の名詞 standard の多義性を記述する。ここでいう多義性の記述とは、ある表現が持つ複数の意味とそれらの意味同士の関係を記述することを指す。本稿で名詞 standard のすべての意味が網羅されていると主張するつもりはないが、事例の大半はカバーされるものと思われる。

記述の枠組みとして認知文法を選択することについて、筆者の立場を明示しておく。まず、言語を記述するだけならば理論を持ち出す必要はないのではないかとされるかもしれないが、どんな言語要素の記述にも理論が影を落とすものである。そもそもある要素を記述対象としている時点で、その要素をそれだけ重要かつ面白いものとみなしているのであり、ここには理論的な志向が入り込んでいる (たとえば熟語の意味は認知文法では重要な記述対象となるが、生成文法の少なくとも一部の流派ではそうならないだろう)。次に、(記述の背後には必ず理論が潜んでいることを認めた上で) どの理論を選択するかに関して必然的な理由を示すことを求める傾向が言語学界には存在するが、筆者はそのようなこだわりを持つことに反対である。記述対象を定めたら記述に用いるべき理論を必然的なかたちで1つに絞ることができないといけなくのだとしたら、そのようなことができるような対象しか記述されなくなり、言語学界全体において記述される対象が偏っていくだろう。加えて、理論ごとに記述対象が異なればかりいては見えてこない理論間の相対的な強み、弱みというものがあるだろう。同

一の対象 A を理論 X で記述したらこうなった、理論 Y で記述したらこうなったという報告が対象 B, C…と蓄積されてくることにより初めて理論 X と理論 Y が明確に比較できていると言える面があるはずだ。このことまで認めた上で、さらに、それならばある同一の対象に対する全理論からの記述を一つの論文の中で提示するべきだという反論も原理的にはありえるが、そのような反論をする者自身、1 つあるいはごく少数の理論にのみ精通しているのであって、そのような者が全理論からの記述を試みればできあがる記述は極めて質の低いものとなるだろう。このような理由から筆者は、(理論による影響を受けて) 興味深い記述対象を見つけた言語研究者は、ただその対象を自分が得意とする理論で記述すればよいのであり、その対象がその理論で記述される必然性があると論じる必要はないと考える。本稿も、standard という名詞が認知文法の枠組みで記述される必然性があると主張するつもりはない。

とはいえ、意味分析のための道具立てが揃っている認知文法が多義語の記述に適した理論であることもまた事実である。以下、2 節で認知文法の性質をごく簡潔に示した上で、意味記述の道具立てのうち本稿との関連で特に重要である「ベース」と「プロフィール」という概念を導入する。3 節ではこの 2 つの概念を用いて名詞 standard の多義性を記述する。4 節は結語にあてる。

2. ベースとプロフィール

認知文法とは言語理論の名称であり、理論とは仮説の一種であるから、認知文法とは仮説の一種であるということになる。それではどのような仮説かといえば、言語のありとあらゆる側面を(言語に特化しないという意味で)一般的な認知能力の現れとして記述することができるのではないかという、ある意味で野心的な仮説である。

「一般的な認知能力」には実に様々なものが含まれるが、本稿との関わりで特に重要なのは、視野全体の中のある一部や、聞こえている音全体の一部などに焦点を絞る能力である (Langacker 1987: ch. 3)。この能力があるからこそ、言語表現の意味構造が成り立っているのである。たとえば英語の arc は円概念を全

体としてその中の一部に含まれる円弧概念を指している（以下、「概念」を省略して「円」「円弧」などと表記する）。認知文法ではこうした全体をベース（base）と呼び、焦点化された一部をプロファイル（profile）と呼ぶ（そのように焦点化することを「プロファイルする」と動詞化して言うことも多い）。意味を模式的に図示する場合には、図1のようにプロファイルを太線で表示することが多い。

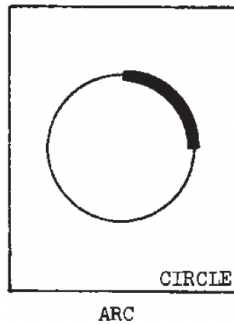


図1 英語の名詞 arc の意味 (Langacker 1987: 184)

類例をさらに挙げる¹⁾。hypotenuse は三角形をベースとしてその中に含まれる特定の線分（斜辺）をプロファイルしている。tip は細長い物体がベース、その先端部分がプロファイルである。uncle はある範囲の親族関係をベースとして、そこに含まれる個人（男性）をプロファイルする。以上3つの語の意味は図2のように図示できる。

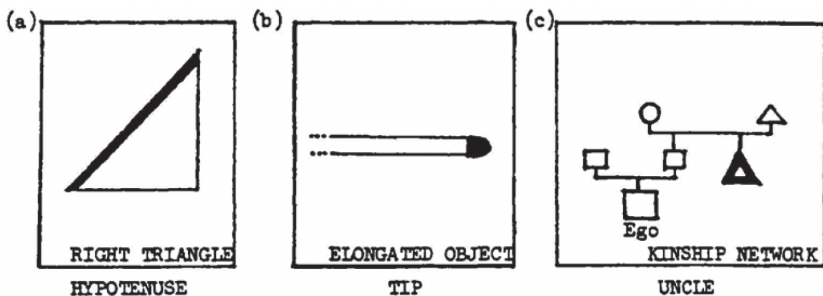


図2 英語の名詞 hypotenuse, tip, uncle の意味 (Langacker 1991: 6)

プロフィールとは要するに指示対象のことなのだが、そのように理解する場合には注意しておかねばならないことがいくつかある。本稿との関連で特に重要なのは、指示対象という言葉は「意味＝指示対象」という意味観のもとに使われがちであるのに対して、認知文法では意味はプロフィール（指示対象）とベースの結びつき方によって決まる（意味＝プロフィール＋ベース）と考えるところである。「意味＝指示対象」としてしまうと、たとえば hypotenuse（斜辺）と segment（線分）は指示対象が同じであるために意味が同じだということになってしまう。この2つの名詞の意味の違いはベースに直角三角形があるかどうかという観点を導入して初めて適切に記述できるものである²⁾。この点に注意しつつ、以下では名詞 standard の意味記述を試みる。

3. 名詞 standard の多義性

本節では、standard という多義的な名詞の各意味、および意味と意味の関係をベースとプロフィールの観点から記述する。大きく分けて、意味 I-V という5つのカテゴリーを設定することができる。

3.1. 意味 I

standard の慣習的な意味のうち本稿がまず最初に記述するものを意味 I と呼ぶことにすると、意味 I は以下の例に共通して見られるものである。

- (1) [状況説明] 世界最高峰の女子バスケットボールリーグである WNBA で3度優勝した Swin Cash についての Tanisha Wright による文章 (Wright もまた WNBA 選手)。

Swin was always the person that people—young girls—from my neighborhood strove to be. She's the **standard**. She's the one we hold up and say, *When you get to this, you've made it.*

(<https://www.theplayerstribune.com/articles/swin-cash-tribute>)

- (2) a. “Steinway is the **standard** against which all other pianos are judged. Only, like

the Stradivarius among violins, no one has been able to quite duplicate its special qualities. The unsurpassed “singing” quality of the sustained notes; the sensitive and prompt response of the action to an infinite variety of touches; the wide variety of “colors” that can be evoked; all these are the hallmarks of Steinway.”—ROY EATON

(<https://www.steinway.co.jp/artists/roy-eaton>)

b. Sheldon: [...] *Star Trek I* is orders of magnitude worse than *Star Trek V*.

Raj: Are you joking? *Star Trek V* is the **standard** against which all badness is measured.

(*The Big Bang Theory*, Season 2, Episode 8)

これらの例に見られる standard の意味の共通点は以下のように整理できる。まず, standard のプロファイル (指示対象) ——ここでは *a is the standard* という文形式によって *a* (スウィン, スタインウェイ, 「スター・トレック 5」) と一致させられるもの *X*——は, 何かのレベル (バスケットボールの技術, ピアノの品質, 作品のひどさ) の高低を示す軸において, ある値 V_X (V は「値」の意味の語である value より) を持つ。そしてこの値 V_X は「参照値」とでも呼ぶべきものである。つまり, 他の何か Y (スウィン以外のバスケットボールプレイヤー, スタインウェイ以外のピアノ, 「スター・トレック 5」以外の作品) を評価する際に, その Y のレベルを高低軸にプロットして得られる値 V_Y を先ほどの値 V_X と比較すると, V_X 以上かそれ未満かによって Y への評価・判定が変わる (バスケットボール選手として成功しているかどうか, 世界最高峰のピアノかどうか, 最悪の作品かどうかが変わる) のである。こうした比較・評価のシナリオ全体が standard の意味 I のベースとなっていると考えられる。

なお, 本稿では「値」というタームを用いるが, 「5」や「78.2」のように数値で表されるものに限定されるわけではなく, 何かのレベルの高低を示す軸上の位置であればよいので, 単に「レベル (level)」や「程度 (degree)」などと言ってもよい。これは単に用語に対する好みの問題である。

さて、プロフィールについて（次節の意味Ⅱの記述との関連で）注意しておきたいのは、意味Ⅰにおいて参照値 V_x が極めて重要な働きをしていることは間違いないものの、意味Ⅰのプロファイル（指示対象）は値 V_x それ自体ではなく、その値を有している X だということである。上の例では *a is the standard* という文形式が取られていることに改めて注目してほしい。もしも *standard* のプロフィールが値なのだとしたら、上の例は、スウィン、スタインウェイ、「スター・トレック 5」は（人間、物体、作品ではなく）値であるという明らかに事実を反した内容を言っていることになってしまう。*standard* のプロフィールは（値それ自体ではなく）値を有しているものであると考えればこのような馬鹿げた事態には陥らない。

本節で提示した *standard* の意味Ⅰの記述は以下のように図示することができる。

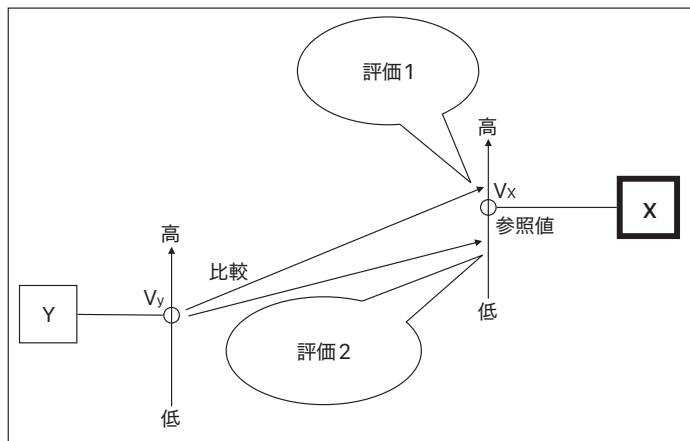


図3 意味Ⅰ

この全体像がベースであり、太線部分がプロフィールである。「評価1」「評価2」とあるのは、 V_y が V_x 以上かどうかによって異なった評価・判定が（ Y に関して）下されることを示している。

本節の最後に、上の例に見られるある種の極端さについてコメントしてお

く。スウィンとスタインウェイはバスケットボール選手、ピアノとして極端に優れているし、「スター・トレック 5」は少なくとも発話者 (Raj) にとっては極端に質の悪いものである。これは、筆者による例の選定がたまたまこのようなものに偏ってしまったことによるのではなく、standard の意味 I のベースにある比較・評価のシナリオと本質的に関わっている。参照値 V_x が中途半端な値だと、 V_y がそれ以上かそれ未満かの違いが有意義な評価・判定の違いをもたらさないのである。たとえば小学生 A 君が 100 点満点のテストで 73 点だったとしよう。この特別〈良い〉とも〈悪い〉とも言えず、「どちらかと言えば〈良い〉寄りか」ほどの印象しか与えない 73 点という数値は、本稿の言う「参照値」としては機能しづらい。たとえばこの点数を 1 点超えただけの 74 点の B 君に関して、「勉強ができる子だ」とどれほどの確信を持って評価・判定できるだろうか？ これに対し、A 君が 73 点ではなく極めて高い点数である 94 点だった場合を考えると、A 君の点数が参照値としてはるかに機能しやすくなる。たとえば C 君がこの点数を 1 点超えただけの 95 点を取った場合であっても、C 君は「勉強ができる子だ」と確信を持って評価・判定できる。このように、極端な値ほど参照値として機能しやすいのである。

3.2. 意味 II

standard の慣習的な意味 II は、以下の (3) に見られるものである。

- (3) [状況説明] ある英語発音辞典の謝辞の一部。

I am, of course, greatly indebted to successive editions of Daniel Jones's *English Pronouncing Dictionary* [...]. EPD has set the **standard** against which other dictionaries must inevitably be judged.

(J.C. Wells, *Longman Pronunciation Dictionary*)

意味 I の (2) との類似性から、(3) も意味 I の例なのではないかと思われるかもしれない。ここで注意されたいのは、意味 I の (2) では [X be the standard ...] と be 動詞が用いられ、X と standard のプロファイル (指示対象) が

一致させられていたが、(3) では [X set the standard ...] となっていることである。ここでは standard のプロファイルは X (=EPD) によって set されるものであって X (=EPD) それ自体ではないのである。それでは、ここでの standard は何をプロファイルしているのだろうか。おそらく、辞書の質のレベルを示す高低軸上で X (=EPD) が持っている値でありかつ他の辞書の質を判定する際の参照値として機能する値 V_X である。standard がプロファイルしているのは参照値であると考えれば、動詞として set が使われていることも説明がつく。EPD が参照値を打ち立てたという趣旨で「EPD が参照値を set した」と言っているわけである（この set は、set a new record 「新記録を打ち立てる」の set と同じで、意図によるコントロールの及ばない達成を表す用法）。

set に加えて、reach ... 「…に達する」や {be/live} up to ... 「…に達している」、meet 「…を達成する」の目的語に standard が現れている場合も、standard のプロファイルは参照値 V_X であって、 V_X を持つ X ではないと判断できる。

- (4) [状況説明] Rube Goldberg という漫画家の伝記から。

He [=Rube] was just not able to accept using other artists or assistants to draw his images, especially if he felt that these artists couldn't reach his **standards**.

(Maynard Frank Wolfe, *Rube Goldberg: Inventions*)

- (5) a. [状況説明] 元噺家の Ohashi が、友人の Hori が笑い話を披露しているところを目撃する。

The joke was a good one, but Hori's storytelling technique wasn't quite up to Ohashi's **standards**—his timing was all off, and he rambled too much.

(Nick Bradley, *The Cat and the City*)

- b. [状況説明] 大学教授 Kevin は同僚たちが同性パートナーである夫の Raymond Holt（警察署長）を見た目ばかりのお馬鹿さんのように扱うことに耐えかね、Raymond がいる場で怒りをあらわにする。

Sure, my husband is a hot piece of ass, but he is so much more than just that. Raymond Holt is as smart as anyone in this department, but he chooses to use his intelligence to make our city a better place. [Kevin turns to face

Raymond.] One day, I hope to live up to the **standard** you set.

(*Brooklyn Nine-Nine*, Season 6, Episode 13)

- (6) [状況説明] ワイドレシーバーとコーナーバックの「二刀流」を目指すとしているアメリカン・フットボール選手の Travis Hunter についての記事。記事内で言及される Ohtani はアメリカのメジャーリーグ (MLB) でピッチャーとバッターの二刀流で活躍する大谷翔平を指す。

The incredible standard Ohtani's set for a two-way player in any sport makes comparisons to the three-time MLB MVP appear inevitable. [...] Hunter seems to have the ability to meet that **standard** [...]

(<https://boardroom.tv/travis-hunter-nfl-draft-value-shohei-ohtani/>)

standard が high など高低を表す形容詞による修飾を受けている場合も、standard のプロファイルは V_x であると言える。以下の (7) を見てみよう。ミルウォーキーのポークチョップ (X) が美味しさのレベルの高低軸においてある高い値 V_x を取り、これが参照値となって他の場所のポークチョップ (Y) の美味しさレベルの値 V_y が比較され、 V_y が V_x 以上であれば Y は「ポークチョップとして合格」などと評価され、 V_x 未満であればそれとは異なった評価がなされるものと思われる。

- (7) [状況説明] 年老いた歌手 Mr. Gardner から語り手 (ギタリスト) にアドバイス。生演奏や生歌唱をする際には、目の前にいる聴衆が昨晩の聴衆とどう違うのかを理解していることが重要だという。

Let's say you're in Milwaukee. You've got to ask yourself, what's different, what's special about a Milwaukee audience? What makes it different from a Madison audience? Can't think of anything, you just keep on trying till you do. Milwaukee, Milwaukee. They have good pork chops in Milwaukee. That'll work, that's what you use when you step out there. You don't have to say a word about it to them, it's what's in your mind when you sing to them. These

people in front of you, they're the ones who eat good pork chops. They have high **standards** when it comes to pork chops. You understand what I'm saying? That way the audience becomes someone you know, someone you can perform to. There, that's my secret. One pro to another.

(Kazuo Ishiguro, "Crooner")

この standard のプロフィールが X つまりミルウォーキーのポークチョップだとしたら、high による修飾を受けていることの説明がつかない（食べ物が high であるというのは意味不明である）。ここでのプロフィールはミルウォーキーのポークチョップではなく、この食べ物と結びついた美味しさの高低軸上の値 V_X であり、だからこそ high による修飾を受けることができるのである。

ここまでは意味Ⅱを意味Ⅰとの違い——プロフィールの違い——に注目するかたちで記述してきたが、ここでベースの共通性に目を向けたい。(3)–(7)における X は EPD, Rube Goldberg, Ohashi, Raymond Holt, Ohtani, pork chops in Milwaukee であり、この X と結びついた高低軸の値 V_X ——辞書としての質の良さ、マンガのクオリティ、ストーリーテリングの上手さ、スポーツの技術の高さ、ポークチョップの美味しさ——が参照値となり、他の Y が持つ値 V_Y がこれと比較される。 V_Y が V_X 以上であれば Y は合格などと評価され、 V_X 未満であれば不合格などと評価される。このように、意味Ⅱのベースは意味Ⅰのベースと同一なのである（ただしこの記述にはすぐ後で修正を加える）。以下の図では、意味Ⅰとの比較がしやすいように、(a) に意味Ⅰの図を再掲し、(b) に新しく意味Ⅱの図を示している。図の全体像が同一であり、プロフィールとして太線による強調が施されている位置だけが異なっていることに注目されたい（ただし記述の修正に合わせてこの図も修正することになる）。

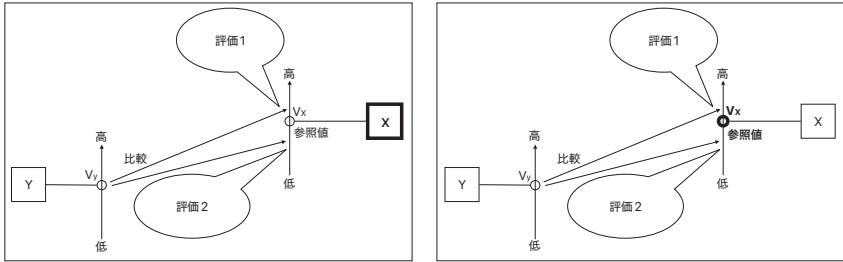


図4 (a) 意味Ⅰ

(b) 意味Ⅱ (修正前)

ここで意味Ⅱのベースは意味Ⅰのベースと同一であるという記述に修正を加えたい。というのも、意味Ⅰでは、Yの値 V_y を参照値 V_x と比較した結果として、 V_y が V_x 以上であるか V_x 未満であるかが振り分けられるということに加えてYに関して「合格か不合格か」「世界最高峰かそこまではいかないか」などといった評価——Yへの「踏み込んだ評価」と呼ぶことにする——がはっきり際立ったものとして含まれていたが、意味Ⅱでは踏み込んだ評価の存在は大なり小なり希薄化されうるのである。たとえばすでに見た(7)の例も、(3)–(6)と違って合格かどうかなどを振り分けるプロセスが状況・文脈の中に含まれていないため、踏み込んだ評価が(3)–(6)に比べて希薄であるといえることができる。

以下の(8)は踏み込んだ評価が(7)よりもさらに影を潜めた例である。

- (8) a. [状況説明] ロンドンのコーヒーショップのガイドブックから。
Dose Espresso というカフェの紹介文の一部。

Owner and barista James Phillips sets a high **standard** in his small but welcoming espresso bar.

(Jeffrey Young and Guy Simpson (eds.) *The London Coffee Guide*)

- b. [状況説明] Terrone & Co. というコーヒーショップの紹介文の一部。

The high **standard** of Terrone's coffee has already garnered plaudits, winning a gold star in the 2012 UK Great Taste Awards.

(Jeffrey Young and Guy Simpson (eds.) *The London Coffee Guide*)

特定の店のコーヒーXがクオリティの高低軸において高い値 V_X を持ち、これが参照値となり、他店のコーヒーYの値 V_Y との比較が行われる。しかし、この比較により V_Y が V_X 以上であることが判明してYが「合格」や「トップクラス」といった烙印を押されているところや、 V_Y が V_X 未満でYが何らかの意味で切り捨てられているところは、想起されたとしても非常に微弱にしか想起されないのではないか。(むしろそうした比較が $\dot{X}$ を別格にしていこうところの方が想起されやすいだろう。)

Yへの踏み込んだ評価の関与はゼロにすらなりうる。たとえばある場所における(典型的には)集団の生活水準を指す慣習的表現である {living standards / standards of living} がそうである。生活水準は(9a)のように異なる場所に暮らす集団同士の暮らしを比べたり、(9b)のように同じ場所の異なる時点の暮らしを比べたりするための概念であり、やはり比較の参照値として機能する。しかし、その比較の結果として片方が「合格」などの評価を下されるわけでは必ずしもない。

- (9) a. People in that area enjoy a high **standard** of living. [=they have a lot of money and are able to live very comfortably]

(<https://www.britannica.com/dictionary/standard-of-living>)

- b. raising/lowering/improving our **standard** of living (*ibid.*)

{living standards / standards of living} は(9)のように(非典型的ではあるが)個人の生活水準を指すのにも用いられる。

- (10) a. [状況説明] あなたが私に今どれくらい稼いでいるのかと尋ねた場合、私は(はっきりと覚えていれば) I earn £797.32 pence a month. と I earn £800 a month. と答える、とした上で…

From either reply you will be able to derive exactly the same conclusions

about my status, **standard** of living, purchasing power, life style, and whatever else you are planning to use my salary as an indicator of.

(Sperber and Wilson 1995: 233)

- b. Policeman: Can I light that for you?
 Columbo: No, no thanks. Trying to cut down. All I do is chew them lately.
 Policeman: Why don't you chew a cheaper cigar?
 Columbo: I don't want to cut down on my **standard of living**.

(*Columbo*, Season 3, Episode 2)

こうした個人用法の場合も、他者との比較や同じ人物の異なる時点の比較を含むが、その比較の結果として想定されるのは A さんの方が B さんよりも生活水準が高いとか、A さんは今よりも過去の方が生活水準が高かったとかいったものであって、それ以上の「合格」「不合格」といった踏み込んだ評価は想定されていない。

以上、意味Ⅱにおける「Y に対する踏み込んだ評価」の際立ちが程度問題であることを見てきた。この点を踏まえて図 4 (b) を修正したものを図 5 に示す。

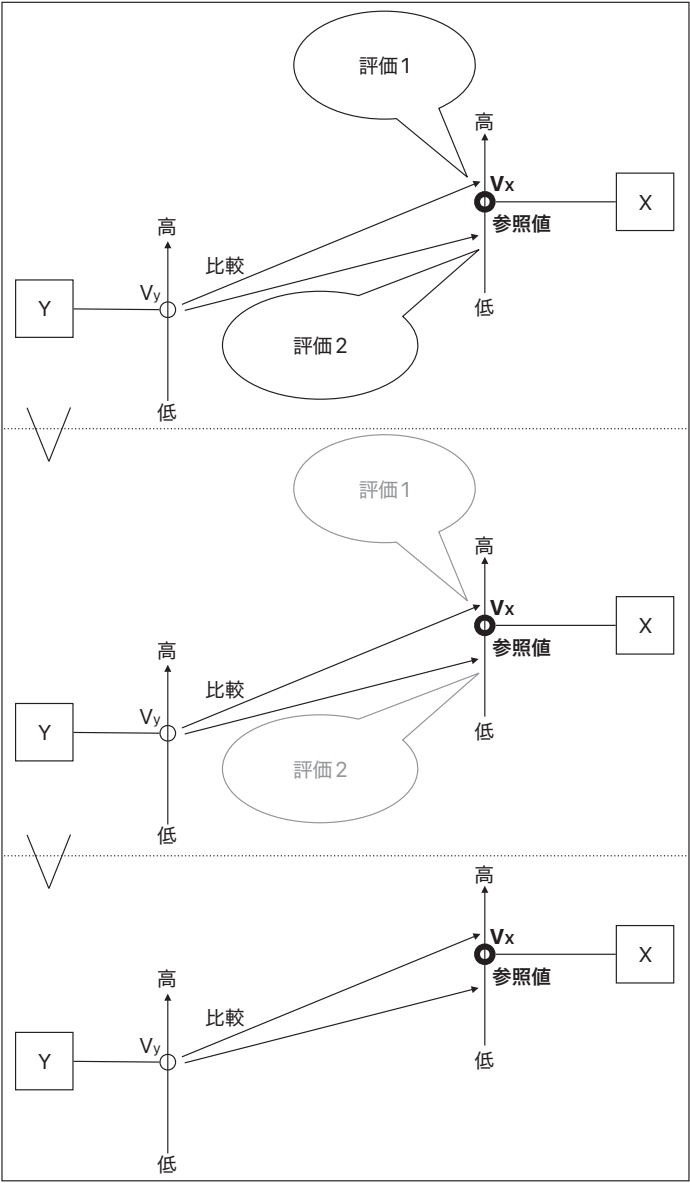


図5 意味Ⅱ（修正後）

図5では、3階建ての建物のような図示の仕方をしているが、これはもちろん便宜的なものであって、踏み込んだ評価の際立ちの度合いをはっきりと3段階に分けることができると言っているのではない。「階」と「階」の間の点線およびその左端に位置しているくさび形が、踏み込んだ評価の際立ちの連続性(グラデーション)を示していると解釈してほしい。

意味Ⅱの記述で最後にもう一つ精緻化しておくべきなのは、XおよびXが持つ値 V_X の性質である。これらは、ボトムアップ的に見出されるものである。つまり、Xが常日頃から、あるいはほとんど全体に渡って、値 V_X を達成しているので、人々がXと値 V_X の間の結びつきを見いだすということである。このことは(3)–(9)で挙げたすべての例に関して成り立つ。standardを打ち立てた発音辞典EPDは全体が素晴らしいと評されているのであり、incredible standardを示した大谷翔平選手はバッターとしてもピッチャーとしてもコンスタントに大活躍しているのである。high standardのコーヒーを提供する店はいつ行っても美味しいコーヒーを飲ませてくれるのであり、living standardsとは息子から父の日のプレゼントとしてもらった食事券を使ってちょっと良いワインとステーキを楽しんだ1日の暮らしぶりを指すのではない。

意味Ⅱの記述をまとめておく。人や物などが日常的に、あるいは全般的に達成しているレベルからボトムアップ的に導き出されたXが、ある高低軸において値 V_X を取る。この V_X が参照値として機能し、Yの値 V_Y との比較がなされる。この比較の結果、Yに関して「合格」「不合格」といった評価がなされるという認識が強く働く場合もあれば、まったく働かない場合もあり、こうした踏み込んだ評価の際立ちとはグラデーションをなす。このシナリオ全体をベースとして、参照値 V_X をプロフィールする。これがstandardの意味Ⅱである。

3.3. 意味Ⅲ

standardの意味Ⅲでは、意味Ⅱとは違って、Xはトップダウン的に押しつけられるものである。次の例を見よう。

- (11) [状況説明] 進学校 Chilton に転校したばかりの Rory は、試験のた

めに教室に入るも遅刻のため試験を受けさせてもらえなかった。
Rory の母親はこの対応を問題視して、Chilton の校長室で（校長と国
語教師の 2 人を前に）怒りを爆発させる。

You set impossible **standards** that make normal people feel less than
everybody else.

(*Gilmore Girls*, Season 1, Episode 4)

この standard にボトムアップ解釈を適用してしまうと、母親の怒りの対象はこの学校の生徒たちがみな日頃から優れすぎていることであるということになってしまう（ V_x は高すぎる値、 x は日頃の生徒たち）。これは自然な解釈ではないだろう。実際、このあと母親は生徒たちの質を下げようと奔走したりはしない。母親の怒りの対象は、正しくは、校長を筆頭に教師たちが生徒に対して「かくあるべし」と求めているレベルが高すぎるということである。「かくあるべし」の「かく」で想定されている存在 x は実際の生徒ではなく教師たちが作り上げた規範的生徒の像のようなものであり、それに実際の生徒たちを従わせようとしている点で、この standard の解釈はトップダウン解釈と呼ぶべきものである（なお、ここでの set は、set a deadline「締め切りを設定する」の set と同じで、意図的設定行為を指す用法³⁾）。次の例（12）も、このドラマでは Amy が高い目標のために自分を追い込みがちな性格の人物として描かれていることを考えると、トップダウン解釈が優勢かと思われる。

- (12) [状況説明] *Brooklyn Nine-Nine* というドラマ cf. 例（5b）のファンサイトより。完璧主義ゆえに同僚たちに笑いの種にされている刑事 Amy についての紹介文の一部。

Nonetheless, Amy will still hold her friends to the same impossible **standards** she sets for herself, which again leads to her coming off as overbearing.

(https://brooklyn99.fandom.com/wiki/Amy_Santiago)

Amy は、自分の理想像 x を設定して、その x が（たとえば「仕事ができる度合

イルしているとも考えられるが、そのレベルと結びついた（理想の自分が有している）性質、つまり「自分は〇〇ができなくてはいけない」の「〇〇できる」という性質（参照性質）をプロファイルしているとも考えられる。（13）の standard も同様に、泥棒なりの品位の高さ（参照値）を指すとも、規範的な泥棒の持つ参照性質を指すとも解釈できる。実質的な文意の違いを生まない以上、こうした2つの解釈は、片方が活性化したらもう片方が完全に封じられるという性質のものではない。

この2種類のプロファイルのあり方を踏まえて意味Ⅲを図示すると以下のようになる（ただし後に修正を加える）。Xに「規範・理想」と下向きの矢印が付けられているのは、意味ⅢにおけるXが、意味Ⅱとは違ってボトムアップ的に導き出されるものではなく、トップダウン的に押しつけられるものであることを反映している。

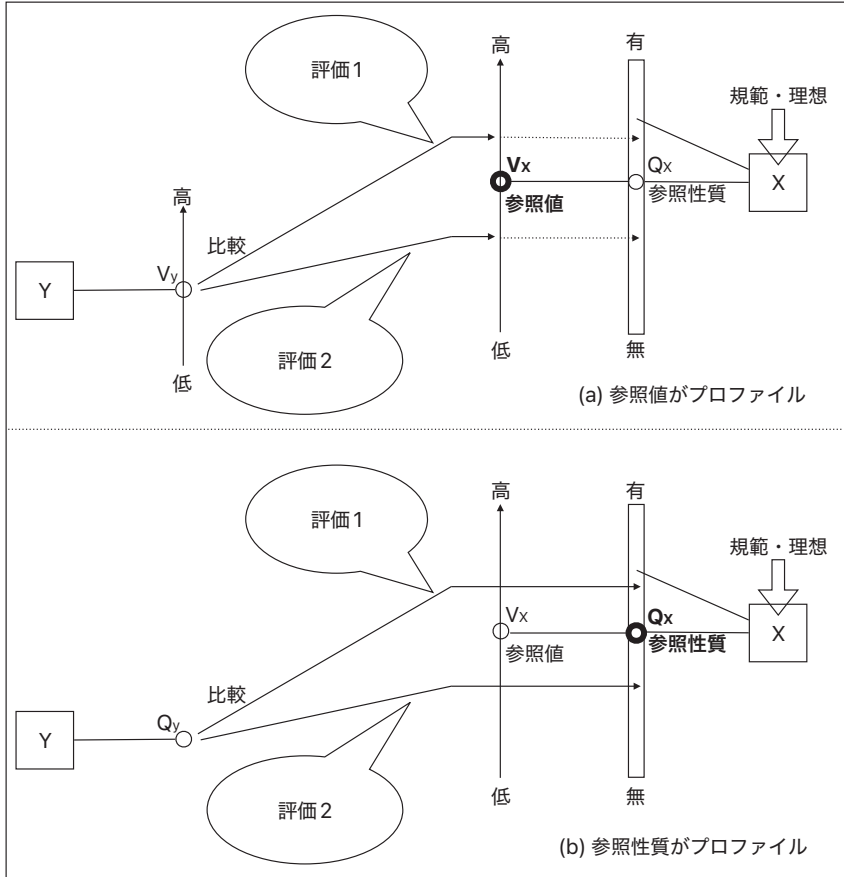


図6 意味Ⅲ（修正前）

この図では、縦長の長方形が参照性質の小円との上下関係で2つの領域「有」「無」に分けられている。参照性質を持つものは上の「有」領域に結び付けられる。規範的存在 X は参照性質 Q_x (Q は quality から) を持つので「有」領域に結び付けられている。「有」「無」領域が高低軸と違って上向き矢印の形状を取っていないのは、参照性質は持つか持たないかのいずれかであり高低軸のようなグラデーションが想定されるものではないことの反映である。すでに述べたように (11)–(13) では Y が参照性質を持っていることと Y の値が参照値 V_x 以上であることが対応し、 Y が参照性質を持っていないことと Y の値が参照値

V_x 未満であることが対応するが、こうした対応関係は、図 6 (a) では値の照合・比較の実線矢印がさらに点線矢印となって性質の「有」「無」領域にまで達していることにより表現されており、(b) では性質の照合・比較の矢印が値の高低軸を貫通していることにより表現されている。要するに、照合・比較の矢印が高低軸と「有」「無」領域の片方としか交わらないということが起こらないように描かれているのである。(a) と (b) の間の点線(実線でないことに注意)は、(a) と (b) は一方が活性化したらもう一方は完全に封じられるという関係にないことを示している。

上で見た (11)–(13) は (a) と (b) の両方の解釈が可能である例であったが、(b) の解釈のみが可能な例も存在する。以下の例 (14) を見てみよう。

- (14) [状況説明] “4 dating tips to help you find ‘the one’” 「「運命の相手」を見つけるためのデートのコツ 4 選」と題されたウェブ記事より。

What are some great **standards** to adhere to while you’re dating? Every prospect should treat you with respect, and should be kind, generous with their time and energy, communicative, accepting of your true self, should put your best interests first, and so on. I want you to make a list of your **standards**. Do it now, before you go on another first date. Then ask yourself with each new date: *Does this person meet my standards?*

(<https://www.yahoo.com/lifestyle/4-dating-strategies-help-find-one-210427150.html>)

まず第 1 文は、デートをしている時にこだわる great standards を読者に問うている。この standard が高低軸上の値(図 6 (a))だとすると、great は high の類義語のように解釈することになり、また本稿の「値」は level と言っても実質的に変わらないものであるから、第 1 文は次の英文と等価だということになる。

- (15) ?? What are some high levels to adhere to while you’re dating?

(15) は「??」が示す通り不自然な英文である。加えて、もしも (14) の第 1 文が (15) のようにレベル (程度) を問う疑問文であるのなら、続く第 2 文でリストアップされるのは、恋人候補の質の高低軸上の値 (レベル, 程度) である excellent, very good, fairly good ... のようなものであるはずだが、実際には Every prospect should ... 「恋人候補たるもの…」でリストアップされているのは「恋人にするのにふさわしい」という評価を受けるのに必要な性質である (図 6 (b))。第 3 文で読者に求めているリストアップも同じだろう (excellent, very good, fairly good ... のようなものをリストアップしてみようと言っているのではあるまい)⁴⁾。

次の例も同様に、(b) 解釈のみが可能な例である。

- (16) [...] in the Harvard Student Handbook, which is distributed to each freshman, under the heading “**Standards** of Conduct in the Harvard Community,” it says the college expects all students to be honest and forthcoming in their dealings with members in this community.

(映画 *The Social Network*)

もしもこの standard のプロフィールが高低軸上の値 (レベル, 程度) だとしたら (図 6 (a)), 学生便覧の当該のセクションには、たとえば真面目さや誠実さの高低軸を想定すると、extremely conscientious, very conscientious, fairly conscientious など、ハーバードの学生にふさわしいと評価されるのに必要な真面目さ、誠実さの値 (レベル, 程度) を表す表現がリストアップされることになるが、そのような便覧は奇妙である。ここでの自然な解釈は、こうした値 (レベル, 程度) と結びつく性質 (参照性質) がリストアップされているという解釈である (図 6 (b))。実際、be honest and forthcoming in their dealings with members in this community はそうした性質の 1 つとして解釈できる。以下のカーメル高校の便覧も同様である。

- (17) The following **standards** of student conduct are offered as guides to the development of campus and classroom rules. [...]

A. Exercise self-control.

[...]

B. Demonstrate a positive attitude.

[...] (CARMEL HIGH SCHOOL, 2019-2020, *Student Handbook*)

ここまでは、ある事例に用いられた意味Ⅲの standard が、図 6 の (a) タイプと (b) タイプのどちらとも解釈できる場合もあれば、(b) のみの解釈が可能である場合もあると述べてきたが、(a) か・つ (b) の解釈が正しい場合もある。以下の例を見てみよう。

- (18) [状況説明] 例 (17) の続き。Carmel High School の生徒が課外活動などで郊外に出向く場合に守らなければならない規則の 1 つを提示している。Is から始まっているが、意味上の主語は a participating student。

Is a district representative of the community, the school, and the team; therefore, he/she acts in accordance with the high **standards** of conduct listed above.

(CARMEL HIGH SCHOOL, 2019-2020, *Student Handbook*)

この例における standard のプロフィールは、the high standards の部分では、high による修飾を受けていることを考慮すると参照値であると考えられるが (図 6 (a))、standards of conduct listed above の部分では参照性質であると考えられる (図 6 (b))。ひょっとすると「同一文中でプロフィール (指示対象) が変わるとするのは不自然であるから、分析に何か誤りがあるのではないか」と思われるかもしれないが、同一文中におけるプロフィールのシフトは珍しい現象ではまったくない。以下の例を見てみよう。

- (19) a. Corrado Barazzutti grimaces with pain as attendants care for **his twisted right ankle** which occurred in the second set ... (福地 1995: 71-72)

- b. [状況説明] 言語学の学術書から。Rosenbach と Taylor は言語学者の名前で、後者については 2003 年刊行の *Linguistic Categorization* という本（第 3 版）が引用されている。

[...] Rosenbach's definition of the prototypical possessive relation is based largely on **Taylor (2003: 228-9)**, who proposes the following criteria for prototypical possession [...]

(Keizer 2007: 329)

- c. We ate **the cans of soup** that were stacked in the pantry.

(Langacker 2016: 23)

- d. Amy: What are you doing here?

Jake: I'm on a **date** who is now leaving.

(*Brooklyn Nine-Nine*, Season 1, Episode 4)

(19a) における his twisted right ankle のプロファイルは、care for his twisted right ankle では足首という身体部位だが³、his twisted right ankle which occurred in the second set では捻挫という出来事である（身体部位が occur するというのは意味不明である）。(19b) における Taylor (2003: 228-9) のプロファイルは based largely on Taylor (2003: 228-9) では書籍（の該当ページ）だが、Taylor (2003: 228-9), who proposes ... では Taylor という人物（言語学者）である（書籍のページを who で受けることはできない）。(19c) における the cans of soup のプロファイルは、ate the cans of soup ではスープであるが⁴、the cans of soup that were stacked in the pantry では缶である。(19d) における date のプロファイルは、I'm on a date ではデートというイベントであるが（平沢 2021）、a date who is now leaving ではデートの相手である（イベントは who で受けることができない）。このように、同一文中でプロファイルが変わるというのはごく自然な現象なのである⁵。(18) においても、standard のプロファイルは the high standards では参照値であるが standards of conduct listed above では参照性質であると考えることにおかしなところはない。

ここまでの standard の意味Ⅲの記述は、もう 1 つの観点で精緻化の余地がある。それは、高低軸の際立ちの度合いという観点である。これまで見てきた例 (11)–(14) と (16)–(18) では、高低軸が相当程度に際立っていたが、以下の

例では高低軸は（まったく意識にないとまでは言いにくいものの）希薄化しており、参照性質の「有」「無」のみが際立っているように思われる。

- (20) [状況説明] Penny が、知人の Christie について、オマハの男全員と寝たことがあるのではないかと言ったのを受けて、Sheldon が Christie のことを the whore of Omaha と表現した。

Leonard: I don't think she's a whore.

Penny: No, yeah, she's definitely a whore. I mean, she has absolutely no **standards**. This one time she was at . . .

(*The Big Bang Theory*, Season 1, Episode 7)

Penny は、Christie が「特定の条件を満たす男性とのみ寝る」という主義を持っていないこと、すなわち参照性質が男性の側にあるかないかに応じた選別を行っていないことを問題にしているのであって、ある特定のレベル以上の男性とのみ寝るという主義を持っているかどうかの話をしている感覚は強くないであろう。また、英語の慣習的な表現に double standard があるが、以下の (21) のように、この表現の使用例の多くで高低軸は影を潜めていると言えそうである。

- (21) I'm sick of the double **standard** that celebrates boys for their sexual conquests and punishes girls for wanting the same.

(*Riverdale*, Season 7, Episode 17)

上の段落で指摘したのは図 6 で言うと (b) からの高低軸の希薄化であるが、実は (a) と (b) の関係も、前者から後者への高低軸の希薄化と考えることができる。というのも、高低軸上の値が (a) ではプロファイルされており (b) ではプロファイルされていないので、高低軸それ自体の際立ちの度合いも (a) に比べて (b) の方が低くなっていると考えられるからである。以上のことを考慮して図 6 の修正版として図 7 を提示する。

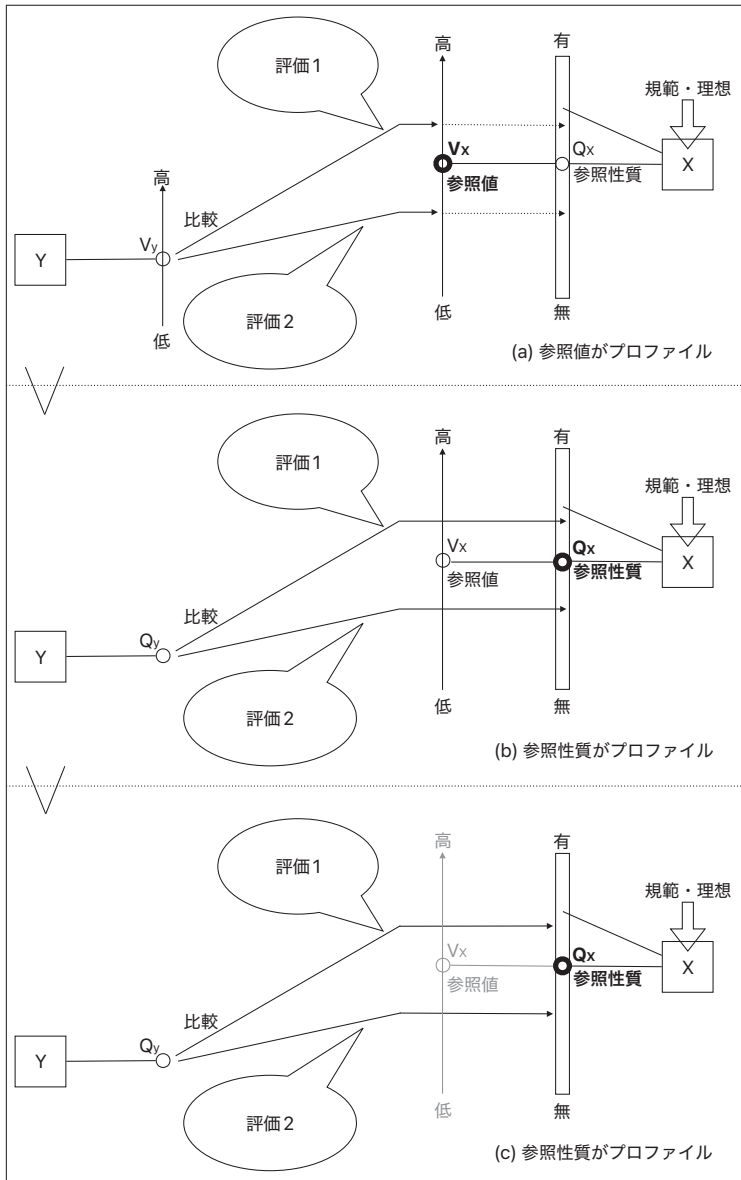


図7 意味Ⅲ (修正後)

新しく加わった (c) では、高低軸（に關係した要素）がグレーで示されているが、これは (b) に比べて希薄化していることを表すものである。(b) の「階」と (c) の「階」を仕切る線が点線になっているのは、この高低軸の際立ちの度合いが程度問題であることの反映である。さらに、(a) まで含めて (a) > (b) > (c) というように高低軸の際立ちが減っていくことが、(a) と (b) の間、および (b) と (c) の間のくさび形で示されている。

3.4. 意味Ⅳ

standard の意味Ⅳは計測単位をプロファイルするものである。以下に例を示す。

- (22) There are all kinds of **standards**—many of which have been handed down to us through the generations and have been accepted by custom. An inch is a **standard** of measurement, a pound a **standard** of weight, a dime a **standard** of monetary value. We take these **standards** for granted, because we have known them all our lives.

(https://www.consumerinterests.org/assets/docs/CIA/CIA1961/1961_white.pdf)

ここでプロファイルされている計測単位とは要するに目盛り付きの高低軸である。図示すると図 8 のようになる。計測対象である Y（たとえば筆者のデスクの上にあるホチキス）の何らかのレベル、程度である V_y （そのホチキスの重さ）がどれほどであろうかと照合を——ある種の比較を——する先が目盛り付きの高低軸であり、その高低軸こそが計測単位（たとえばポンド）なのである。

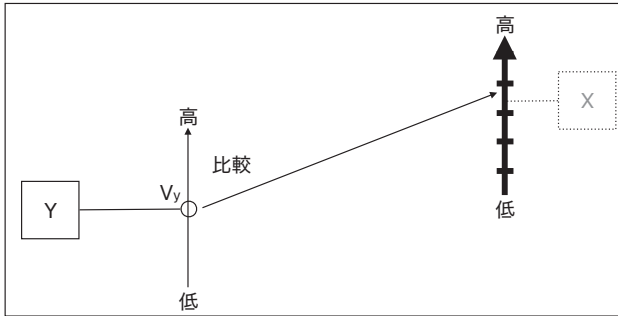


図8 意味Ⅳ

高低軸（プロファイルされているため太線で描かれている）に結びついたXが点線およびグレーの文字で表示されているのは、計測単位それ自体と結びついたものの存在が意識の中で際立ちにくいことの反映である。たとえば「ポンド」であれば、それを[・]使[・]つ[・]て物体の重さを表示できるという認識は強く働くが（そしてその意味では物体が際立っておりこのことはYが実線と黒文字で表示されていることに反映されている）、それ[・]自[・]体[・]が物体を喚起する度合いは非常に弱いと思われる。「13 ポンド」という値であれば、物体の持つ性質の一種であるから、物体を喚起しやすいが、「13」や「54」などのつかない「ポンド」それ自体が物体を喚起する度合いは相当弱化するだろう（Langacker 2016: 24-25 の gallon についての議論も参照）。図8についてはもう一点、「評価1」「評価2」という表示がないことに注意されたい。たとえば a standard of weight というふうに standard を用いるとき、そこには、ある値以上であれば合格などと評価され、それ未満であれば不合格などと評価されるといった意味合いは全く入ってこない。

3.5. 意味Ⅴ

standard の意味Ⅴは、Yと比較されるXをプロファイルする。以下に言語学の学術書から2つ例を示す。

- (23) a. In *Marsha resembles Hilda*, for example, Hilda serves as a **standard** of comparison with respect to which Marsha is evaluated, while in *Hilda*

resembles Marsha these roles are reversed. (Langacker 1991: 222⁶⁾)

- b. [...] comparison is an inherently asymmetric relationship between a compared entity and a **standard** of comparison. As a result, *X BE like Y* is an inherently semantically asymmetric construction. [...] since we normally attribute a parent-child resemblance to the parent's causal role in the child's genetic makeup, we would normally say, *Sue is like her father*, rather than, *Dave is like his daughter*. But if, for example, we were Sue's teachers, meeting her father for the first time at her college graduation, we could easily imagine saying, *I recognized Sue's dad immediately, he's so much like her*. This is because Sue is now our **standard** of comparison, since she is the familiar one.

(Dancygier and Sweetser 2014: 142)

standard が (23a) では Hilda serves as a ... に, (23b) (の後半) では Sue is now our ... に続いている。このことから, ここでの standard のプロファイルは Hilda / Sue 自身, つまり本稿の記号体系で言うならば (X の値 V_x でも X の性質 Q_x でもなく) X そのものであると言える。ここで想定されている比較はありとあらゆる比較を含んだ最も広い意味での比較であり, 高低軸上の値の比較であるとか, (そのような値ではない) 性質の比較であるとかいった指定はない (上の例文の通り)。

意味 V は図示すると以下の図 9 (a) のようになる。

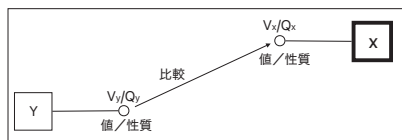
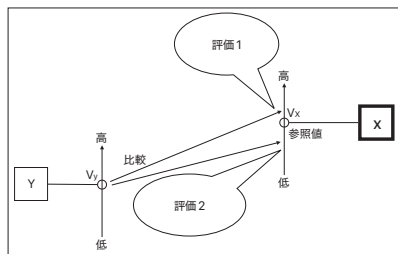


図 9 (a) 意味 V



(b) 意味 I (再掲)

単なる X と Y の比較ではなく X と Y の値同士あるいは性質同士の比較のように図示されているのは、人間が（コミュニケーションにおいて）何かと何かを比較するときには必ず何かしらの意味で揃った側面同士に着目するものであることの反映である。たとえば豚肉と鶏肉を比較するなら肉としての油っぼさの度合い、親と配偶者を比較するなら人間としての性質（外見の性質でも内面の性質でもよい）、仕事と配偶者を比較するなら大事だと思う度合い、というように比較の側面を揃えるのである。豚肉と鉛筆を普通比べない感じがするのは揃えるべき側面が思い浮かびにくいからであり、一方で比べようと思えば比べられるのは豚肉と鉛筆で共通して存在している（たとえば重さなどの）側面を見出すことができるからである。

意味 V は X がプロファイルされる点で意味 I と似ている。意味 I との違いは、Y に対する踏み込んだ評価（およびその評価に利用される高低軸）がベースに含まれているかどうかである。意味 I の例（1）を以下に（24）として再掲し、これを（25）と比較してみよう。

- (24) Swin was always the person that people—young girls—from my neighborhood strove to be. She's the **standard**. She's the one we hold up and say, *When you get to this, you've made it.* = (1)
- (25) In *Jack is older than Swin*, Swin serves as a **standard** of comparison.

(24) では、Swin がバスケットボール選手としてのレベルを示す高低軸上で持つ値以上の値を Y が持つとしたら、Y には（単にそのような値に達したということにとどまらない）you've made it という踏み込んだ評価が下されるのに対して、(25) では、Swin が年齢を示す高低軸上で持つ値以上の値を Y（Jack）が持っているからといって、Y に「Swin より年上だ」よりも踏み込んだ評価が下されることはない。

4. 結 語

本稿では名詞 standard の意味を大きく 5 つに分類し、各意味を（もしあれば

内部のグラデーションまで含めて) 記述したうえで、意味間の関係についても論じた。ベースとプロファイルという認知文法概念——というよりも〈全体〉から〈一部〉に焦点を絞る認知能力が言語表現の意味に関わっているという言語観・意味観——を採用することにより、意味と意味の共通点と相違点が見えやすくなるということがわかってもらえたのではないかと思う。

最後に、意味 I-V の記述を終えたこの段階だからこそ言えることを一点付け加えておくと、意味 I-V のすべてに関わっている要素が 1 つある。それは比較である。何かを何かと比較・照合するというプロセスはこれらすべての意味(のベース)に含まれているのである。このことを踏まえて Langacker の以下の引用を見られたい。

認知処理および経験の構造化を根本から支えているのが、事象同士を比較し、その間の対立や食い違いを検知する能力である。こうした比較が働いている事例としては、暗い背景の中に浮かぶ明るい点を知覚する場合や、綴りのミスを発見する場合などを挙げることができる。私の想定では、2 つの事象を比較するこの能力は一般的な能力であり、かつ、遍在する能力である。すなわち、比較行為は活性化しているすべての認知ドメインにおいて絶えず、様々な次元の抽象度・複雑さで起こっているものであり、ドメインや次元によらず、同じ基本的な能力の顕れである(少なくとも機能的には類似している)。 $[\dots]$ このような行為は、一般的なスキーマとして記述すると、 $S > T$ という形を取る。 S を比較の基準 (standard), T を比較のターゲット (target) と呼ぼう。これらの用語が示唆する通り、ここに成り立っているのは非対称的な関係である。基準はベースラインの事象または参照点として働くのに対して、ターゲットはこれとの相対において評価されるのである。この二者を結びつける操作、つまり $>$ を以下では走査 (scanning) と呼ぶ。「走査」という用語はこの操作の方向性を反映している。ある意味でこの操作は S から T への「移動」であり、 T の値は S からの「逸脱」の程度によって決まるのである。

(Langacker 1987: 101-102; 訳は引用者、強調は原文)

Langacker は、認知文法の創始当初から、(言語の習得・使用を含め) 人間の認知活動において比較という行為が果たす役割を重視している。その比較行為の原点に対応する要素を指す用語に standard という語を採用しているのも、(standard の意味 V がここで Langacker が意図している意味に相当するからということに

加えて) 比較という行為が standard の意味 I-V に共通するものであることを考えると、大いに納得がいくというものであろう。

* 原稿の一部あるいは全体に関してコメントをくださった野中大輔氏、萩澤大輝氏、松田俊介氏に感謝したい。

- 1) 紙幅制限の都合で、本稿の分析対象 standard の品詞である名詞の例しか挙げないが、ベースとプロフィールによる記述は動詞、形容詞、副詞、接続詞など多くの品詞に対して有効である。例外は間投詞など (Langacker 2008: 13.2.4)。
- 2) 注意すべき点のもう 1 つは、指示対象という言葉は世界に存在するものに限定して用いられる場合も多いのに対して、認知文法におけるプロフィール (指示対象) とは頭の中にあるもの (概念) だということである (Langacker 1987: 5.1)。Godzilla のように架空の存在をプロフィールする表現や kindness のように抽象概念をプロフィールする表現はもちろんのこと、cat や pen などであってもそのプロフィール (指示対象) は現実世界に存在し物理的に触ることができる対象それ自体ではなく、それが話者の頭の中で概念化されたもの (つまり概念) なのである。
- 3) したがって、意味Ⅱと意味Ⅲを比較すると、実際の人や物からボトムアップ的に「普通どうであるか」が導き出される場合と、規範・理想としてトップダウン的に「こうあるべき」と押し付けられる場合とで同じ (standard という) 語が用いられていると言える。英語圏の文化では日本文化と違って「普通」に合わせることが美德とされない、つまり「普通どうであるか」が「こうあるべき」に読み替えられない、という趣旨のことがよく言われているが、もしも歴史的に意味Ⅱが先にあって意味Ⅲがそこから発展して出てきたのだとしたら、この種のステレオタイプは少なくとも standard という名詞が語ってくれることとの関連で言えば成り立っていないことになる。通時的研究が待たれる。
- 4) なお、(14) の最終文における standard は (11)–(13) と同様に (a) 解釈も (b) 解釈も可能であると思われる。(a) 解釈は、3.2 節の例 (6) と同じく meet と standard の結びつきを「レベルに達する」のように捉える解釈である。(b) 解釈は meet と standard の結びつきを「条件を満たす」のように捉える解釈である (ある評価を受けるのに必要な性質とはすなわちその評価を得るための条件とも言える)。
- 5) こうした現象は TOEIC 教材で扱われている英文にも見られ、しかもその教材の執筆者がそれに気がついていない (ことにより誤った記述をしてしまう) ケースがあるという興味深い指摘が萩澤 (2024) に見られる。
- 6) 原文では例文番号を参照し In (16a) ... while in (16b) ... となっているが、本稿の例文番号を指しているように見えてしまうことを避けるため、引用に際して、例文

番号ではなく例文それ自体を表示するようにした。

参考文献

- Dancygier, Barbara and Eve Sweetser (2014) *Figurative language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 福地肇 (1995) 『英語らしい表現と英文法——意味のゆがみをともなう統語構造——』 東京：研究社出版。
- 萩澤大輝 (2024) 「TOEIC 教材を言語学的に検討する：メトニミーの扱いをめぐって」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 (外国語編)』 15 (2): 35-52.
- 平沢慎也 (2021) 『実例が語る前置詞』 東京：くろしお出版。
- Keizer, Evelien (2007) *The English noun phrase: The nature of linguistic categorization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol.1: *Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Concept, image and symbol*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2016) Nominal grounding and English quantifiers. *Cognitive Linguistic Studies* 3 (1), 1-31.
- Sperber, Dan and Deidre Wilson (1995) *Relevance: Communication and cognition*. 2nd edition. Oxford: Blackwell.

補遺

本稿の例文の拙訳は以下の URL からダウンロード可能。

https://researchmap.jp/shiraresearch/published_papers/51153759